報　告

イギリスにおける現代ギリシャ語学文学研究

橘　孝司

0. 筆者は1992年9月から1993年12月までオックスフォードに滞在し、イギリスにおける現代ギリシャ語学文学研究の現状に触れることが出来た。ここにその一端を紹介しておきたい。

1. オックスフォード大学での現代ギリシャ語学文学研究

オックスフォード大学の現代ギリシャ語学科は、中世・現代語学文学科の下位学科に組み込まれている。主任の講師ピーター・マクリッジ博士(Dr. Peter Mackridge)による講義の他に、語学アドバイザーのメリー・コウルトン女史(Mary Coulton)によって実践的な語学の授業が行われている。文献は、有名なボードリアン図書館のほか、現代語学文学専門のテイラー図書館のスラブ・ギリシア分館に相当数所蔵されている。この分館の閲覧室の壁には、R.ドーキンズ、J.マヴロゴルダート、C.トリパニスといった歴代の教授の肖像が飾られていた。

マクリッジ博士は現代ギリシャ散文の研究からスタートされた方で、コズマス・ポリティスのいくつかの作品の監修者であるが、驚くべき広範な知識でもってディゲニス・アクリティス、ソロモスから言語問題に至る数々の論考を発表されている。これらに加えて特筆すべきは、現在最も優れた現代ギリシャ語記述文法の一つ"The Modern Greek Language(1985:Oxford UP,1987:ペーパー版)"の著者でもある。御本人は、自分は言語学の専門ではなく独習しただけ、と謙遜されるが、そこに使用される広範膨大な資料、言語に対する鋭い観察と分析記述の明晰さ、術語を濫用し過ぎることのない健全性によって、この著作は現代ギリシャ語学研究の重要な基本文献となっている。

さて、マクリッジ博士は、学部生を対象とした講義の他、週に一度(年により週に二度)、主に大学院生を対象としたセミナーを組織している。そこでは、現在進行中の研究について発表者が約一時間話した後、出席者によって質疑応答を交えた議論が行われる。このセミナーの長所は(他の学科のセ

ミナーも同様であるが）、非常に開放的である点で、興味があれば誰でも出席出来る。プログラムは各学期の初めに掲示されるので、それにしたがって、学科の枠に関係なく様々な人が参加する。オックスフォードを短期間訪問している他国の研究者が聴講する場合もあった。1992-93 年のプログラムの一部を以下に掲げておく。ほどんどが文学関係で、言語学はArvaniti 女史のみであり、発表は英語でなされる場合と、ギリシャ語の場合とがあった。

S.Ekdawi:"*Σφυρίγματα καράβιων*:the last poems of Yannis Ritsos"
A.Arvaniti:"Sociolinguistic aspects of the prenasalization of voiced stops in Greek"
Y.Karavidas:"Surrealism versus the 'Greek Truth':an approach to Elytis' early poetry"
N.Anaxagorou:"Narrative structure in the Chronicle of Leontios Machairas"
P.Mackridge:"Quotation,plagiarism and intertextuality in Politis' *Eroica*"
G.Kallinis:"*Μύθος και μυθιστόρημα στα τρια πρώτα μυθιστορήματα του Κοσμά Πολίτη*"
E.Broman:"Narrative voices in Politis' *Στου Χατζηφράγκου*"

ただし、以下の五つの発表は " Topics in Medieval and early Modern Greek Grammar" という共通テーマの下で行われた。（このテーマはマクリッジ博士にとって初めてとのこと）

M.Jeffreys:"The dekapentesyllavos and the mixed language of late Byzantine texts"
T.Tachibana:"Spatial expressions in Byzantine vernacular literature"
P.Mackridge:"The medieval Greek infinitive in the light of modern dialectical evidence"
G.Horrocks:"Perfects"
D.Holton:"Future and conditional periphrases in sixteenth- and seventeenth-century Cretan literature "

また週によっては、より多くの聴衆を想定した講演がこれに変わる場合もあるが、形式的にはセミナーと同じであった。若干を掲げると、

W.F.Wyatt,Jr.:"Vizyenos in Germany"
J.Stathatos:"Last poems of old men:Seferis' *Three Secret Poems*"
G.Kechayoglou:"Σεφέρης-Καζαντζάκης:μια παράδοξη συνάντηση στη Λευκωσία"

これらのセミナー・講演に関してとても羨ましく思われたのは、内外の他大学との交流が非常に盛んであることだった。例えば、上記の内で、Horrocks・Holton の両博士はケンブリジ大学、Jeffreys 教授はオーストラリア・シドニー大学、Kechayoglou 教授はギリシャ・テサロニキ大学から招かれていた。

さらにビザンツ学に関しては、Cyril Mango 教授と James Howards-Johnston 博士による講義・セミナーがあり、その他にもビザンツ考古学の講義も多数行われているようである。1993年4月2日から6日にかけては、オックスフォードで、「第27回ビザンツ学春期シンポジウム」(27th Spring Symposium of Byzantine Studies) が開かれた。全体のテーマは "Constantinople and Hinterland" で、"The Land and Its Products"、"Administration"、"Defence"、"Communication between Capital and Hinterland"、"The Sea and Its Products"、"Manufacture and Export" 等々と名づけられた各部会において、50名ほどが研究発表をおこなった。参加者は、イギリス以外には、アイルランド、フランス、ギリシャ、ドイツ、アメリカ、トルコ、などから約180 名。研究発表会と平行する形で、"The Byzantine Bridge between East and West"、"Manuscripts from the Hinterland of Constantinople"という二つの展示会も開かれた。5日の夜には、歓迎会の一環として、Francis Warner 作の二幕劇 "Byzantium" がオックスフォード大学演劇協会によって演じられた。6世紀の首都を舞台にしたこの劇には、ユスティニアヌス帝と皇妃テオドラを中心に、ベリサリウス、アガシアスからインド航海者コスマスに至るまで、この世紀が生んだ著名な人物が賑やかに登場する。「ニカの乱」では、観客も「ニカ！ニカ！」と叫ぶように指示されたが、"Nika" の発音が「ニカ」やら「ナイカ」やらで揃わなかった。(ビザンツ史の素人である筆者にとっては、研究発表よりも、寒い早春の夕刻にエクセター・カレッジの大礼拝堂で厳かに演じられたこの劇の方が鮮烈に記憶に残っている。)

2. イギリスの他大学での現代ギリシャ語学文学研究

ちなみにイギリスの他大学での現代ギリシャ語学文学研究について述べておく。本格的に研究が行われているのは以下の大学である。

University of London (King's College)
University of Birmingham (Center for Byzantine, Ottoman & Modern Greek Studies)
University of Cambridge (Faculty of Modern and Medieval Languages)

これら以外にも、Belfast、Bradford、Edinburgh、Leeds、St Andrews の各大学で現代ギリシャ語が学べるようである。大学間の交流は非常に盛んであり、上述のように、各大学ともセミナーで研究発表に招き合って、常に情報交換を行っている。

1993 年 5 月 15 日には、博士論文製作中の若手の研究者達を中心としたリサーチ・コロキアムが、ケンブリジ大学で開かれ、各大学から40名弱の教官・学生が参加した。テーマは "Texts and Reading in Medieval and Modern Greek Literature" という広範囲なもので、研究の対象とされていた文学者は、A.パパディアマンディス、M.ミツァキス、F.コンドグル、K.ポリティス、A.エンピリコス、M.アラバンディヌ、G.セフェリス、A.ランガヴィス、中世では「テセウス物語」、L.マヘラスの「年代記」など。発表者 10 名の内、8 名が、ギリシャ人であったのが印象的であった。

なお、現代ギリシャ語学文学及びビザンツ研究に関して、イギリス最大の雑誌は、バーミンガム大学発行の Byzantine and Modern Greek Studies であり、1976 年より毎年刊行されている。

以上のようなイギリスの現代ギリシャ学研究機関は、Standing Committee on Modern Greek in the Universities (SCOMGIU) を組織しており、学生のための小冊子 Modern Greek at University: A Guide for Applicants の中で各々の研究内容を簡単に紹介している。

3. 第一回国際ギリシャ言語学会議 (First International Conference on Greek Linguistics)

1993 年 9 月 16～ 18 日、ロンドン西方のレディングで第一回国際ギリシャ言語学会議が開催された。主催者はレディング大学 (University of Reading) の Irene Philippaki- Warburton と Katerina Nicolaidis 両女史（このうち前者は現代語の優れた記述文法 "Modern Greek" の著者の一人）。参加者

はリストによれば115名、最も多かったのがイギリスとギリシャからの参加者で、それ以外に、ドイツ、オランダ、フランス、アメリカ、ルーマニア、オーストリア、スウェーデン、ロシア、ベルギー、リュクセンブルク、スペイン、オーストラリア、アイルランドから出席していた（ただし、これらは参加者の国籍ではなく、現在居住している国のようだ。名前を見ると、ギリシャ人が大多数だった）。これらの内、77名が三会場に別れて発表を行った。さらにこれに加えて、現在の（現代）ギリシャ語学をリードする専門家による全体共通の講演が四つあった。それらは以下の通り。

George Babiniotis,"Σύγχρονη γλωσσολογία και η διδασκαλία της Ελληνικής γλώσσας"
Dimitra Theofanopoulou-Kontou,"Transformational Grammar and Modern Greek Syntax:an overview - some problematic cases"
Brian Joseph,"Weak subjects and pro-drop in Greek : synchronic, diachronic,typological and psychological perspectives"
Aggeliki Malikouti-Drachman,"New approaches to some problems of Greek Phonology"

会議では、どの時期のギリシャ語を研究対象とするか、には限定がなかったものの、現代ギリシャ語を対象とした研究が圧倒的に多かった。発表はほとんどが英語でなされたが、質疑応答では英語とギリシャ語とが使われ、実質的には現代ギリシャ語学会の趣があった。筆者は特に現代語の意味論と統語論に関するものを聴講した。若干例を上げると、

Yannis Veloudis,"The category 'perfect' in Modern Greek"
Linda Manney,"Pragmatic motivation for inflected passive construction in Modern Greek"
Despina Markopoulou,"Free relatives from Medieval to Modern Greek"
Yannis Baslis,"The development of subordinate clauses in the language of Greek children"
Artemis Alexiadou,"On aspectual and temporal adverbs"
Amalia Moser,"The interaction of lexical and grammatical aspect in Modern Greek"
Simos P.Grammenidis,"The verb 'πηγαίνω' and 'έρχομαι'"
Maria Tsipera," The history of Cypriot Greek mirrors the history

of the island"

この他スケジュールが重なって聴講できなかったが、以下のような民族誌的に興味深い研究もあった。

Fatima Eloeva,"Ethnic Greek group of Tsalka and Tetritskaro regions, central Georgia"

Lia Brad-Chisacof,"Modern Greek in the Romanian principalities (17th-19th) registers"

言語理論を文学分析に応用する研究も、少ないながらみられた。例えば、

Chryssoula Karantzi,"A stylistic study of the 'Odes' of Andreas Kalvos:original metaphors and syntagmatic relations"

Nadia Anaxagorou,"Mood in the chronicle of Leontios Machairas"

何名かの発表キャンセルによって予定がずれて時間が余ったため、二日目の発表終了後、全員参加の討論が行われた。議題は「新しい現代ギリシャ語文法の編纂について」。フィリパキ女史（レディング大）が議長となり、まずドラックマン氏（ザルツブルク大）が、現代ギリシャ語学の知見も随分と蓄積された現在、新しい文法書を数年計画で編纂してはどうかという旨の提言を行った。ところが、これに続く議論は思わぬ方向に展開していった。ドラックマン氏の意図は、これまでの様々な研究の成果を集大成したレファレンス・グラマーの編纂にあった（と筆者は思う）のだが、文法と聞いて、規範文法を思い浮かべる人、あるいは教育の問題と結びつけて考える言語学者が多く、議論の重点が教育の問題に移行してしまった。結局ドラックマン氏の提言の積極的支持にまでは至らなかったが、公式的には解決済みのはずのギリシャの言語問題の深刻さを思わぬところで知る事になった。

二日目の公式のディナーでは、この会議を契機に国際ギリシャ語学会を創設し、雑誌も刊行する提案が出され、最終日の全体会議で可決された。会議論文集は1994年中に出版される見込みである。

なお、この会議については、ギリシャの Βήμα 紙（10月24日）に < Τα ελληνικά των...ελληνιστών > の見出しで簡単に紹介された。

第二回大会は二年後オーストリアのザルツブルクで開かれる予定。